

NIPPON

かわら版

65号



日本製紙

発行所 東京都千代田区神田駿河台4丁目6番地 〒101-0062 日本製紙株式会社新聞営業本部 電話 03-6665-1030 FAX 03-6665-0319 www.nipponpapergroup.com/ newsprint@nipponpapergroup.com ©日本製紙株式会社2019



新春提言

日本製紙株式会社 常務執行役員 新聞営業本部長 前田 高弘

あけましておめでとうございます。平成、そして2010年代最後の年を迎えました。改元、参院選挙、東京五輪まで一年、アジア初ラグビーW杯、消費増税など、私たちの生活や景気に大きく影響するイベントが盛りだくさんで、新聞の果たす役割も非常に大きくなりそうです。一方、新聞用紙を取り巻く情勢はたいへん厳しい状況で、大きな正念場を迎えております。今年が亥年ですが猪突猛進というわけには行きません。スピード感も大切ですが、地に足を付けじっくり考えながら2019年をどう過ごすか。今後も新聞社の皆様と末永くお付き合いさせて頂くうえで大事な一年になると認識しております。2019年を「新聞元年」として捉え、どういう年になるのか、どういう年にしたいのか。かわら版NIPPON編集部が考える決意と期待に、しばしお付き合い頂きたいと存じます。

2019年の新聞動向を予想 かわら版NIPPON編集部

古紙狂乱

昨年来、中国の環境規制、米中二国間の経済政策にもてあそばされ、新聞古紙は輸出増による価格の超高騰と在庫不足に悩まされ続けています。企業努力の限界を超え、安定供給と再生産の継続が困難な状況であり、国内の古紙リサイクルシステム崩壊の危機でもあります。こうした状況を少しでも改善すべく、企業、業界の垣根を超えた取り組みも始まり、今年は古紙改革元年になればとの期待もあります。中国の動向からも引き続き目が離せません。2020年に古紙輸入を禁止するとの計画があり、これが本当に実施されることになれば、今年の後半頃から何等かの影響が出るかもしれません。一部新聞社様でご支援頂いている販売店回収あるいは工場損紙のクローズド・ループの取り組みは極めて有効な手段であり、一層のご支援ご協力を賜りたいと存じます。

どうなる発行部数

年々拡大する部数減。折しも新年度予算作成真ただ中ですが、販売

マイナス予算づくりが恒例行事となり、それに慣れつつある自分たちが怖くもあります。直近の傾向では朝刊で前年比5%もの部数減が続いており、冷静に考えれば、この基調は今年も続くか若干拡大するものと予想しております。

一方で購読料の改定が部数にどう影響するのか。私たち製紙メーカーも強い関心を持っています。価格に負けない商品力向上で、読者離れが加速しないことを切に望んでいます。

つくり方改革 +つかい方改革

お客様にご安心頂ける品質保証はメーカーとして果たさなければならぬ根幹であり、不変であるべきだと考えています。一方で原料であるパ

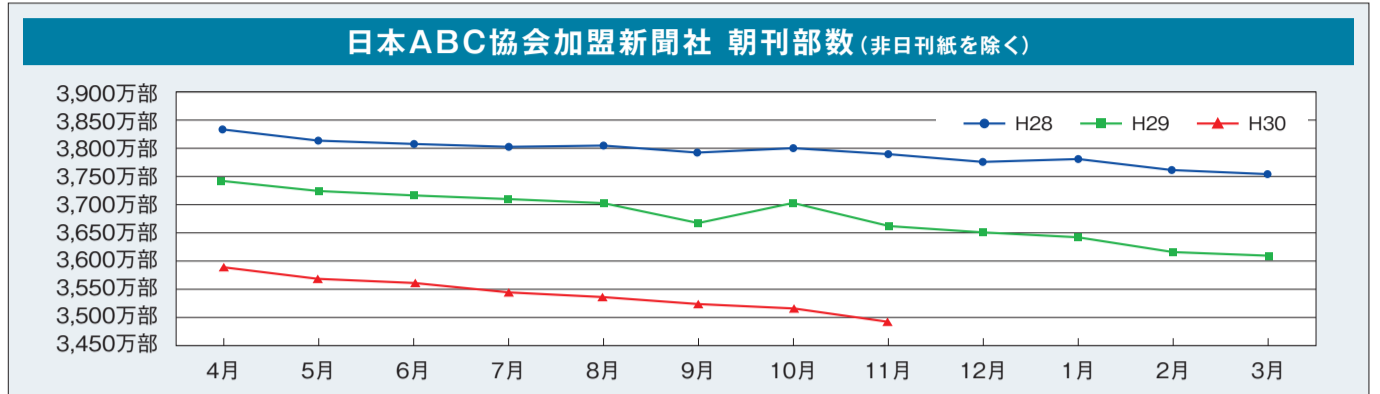
ルプや古紙は100%完全同質のものを使い続けることが出来ないため、多少の変動があることを前提に、品質維持に努めています。その結果、抄紙工程ではどうしても一定レベルで異物や穴などが発生し、オンラインで検知後、最終工程で取り除く作業を行っていますが、作業効率の低下や原料戻しによる生産性低下を招きます。そこで断紙などのトラブルで印刷工程にはご迷惑をお掛けしないことを大前提に、あえて輪転機紙面検査装置で除去して頂くことが出来ないか、ご相談の準備を始めています。通常紙面検査で排紙が掛かれれば、そこから不具合箇所を探し、それ以外は有効紙とされるため、オペレーターの皆様のご負担にもなりますし、損紙率

の上昇にもつながります。そこで排紙分はそのまま損紙にして頂く代わりに、当該損紙分を当社が負担させて頂けないか、というご提案です。具体的な運用方法については個々の新聞社様とご相談させて頂くこととなりますが、新聞社、印刷会社、印刷工場、製紙メーカーすべてがWINWINと成れることが期待されます。

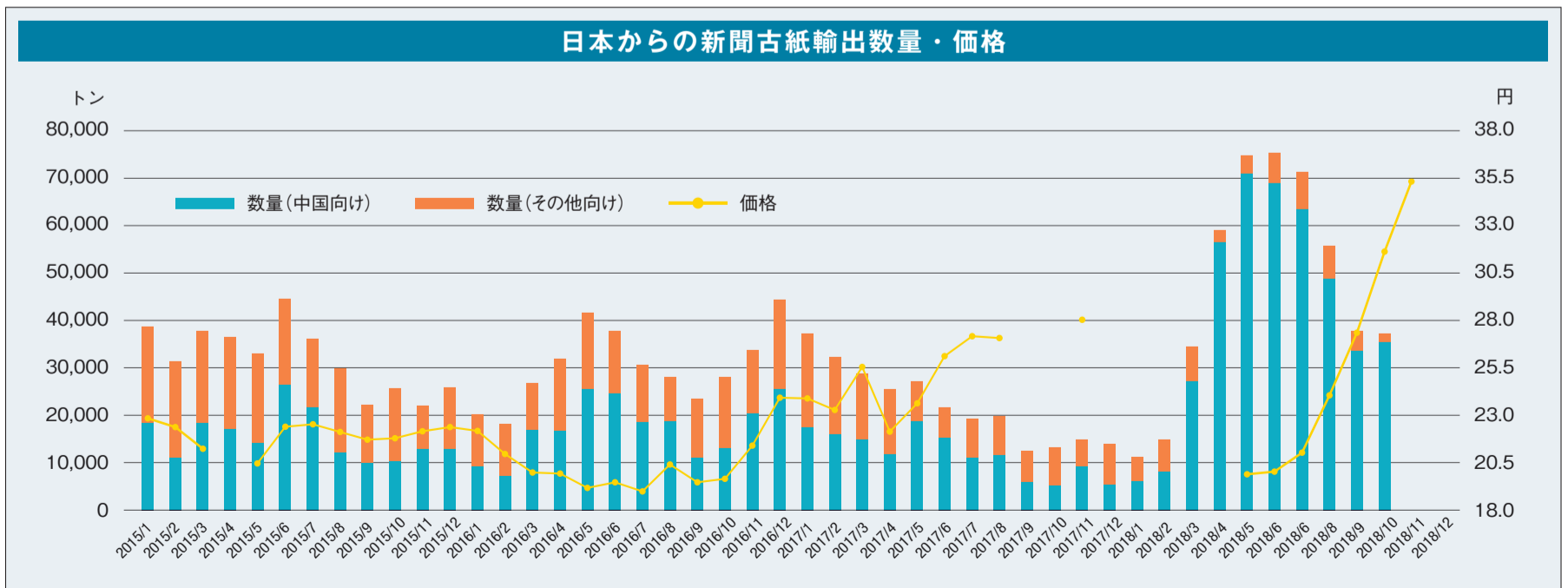
新聞ブーム元年に

冒頭にも触れましたが、今年イベント盛りだくさんの大きな節目の年です。改元を機に皇室に対する知識や理解を深める。参院選や消費増税で今後の国の在り方を考える。ラグビーW杯開催や東京五輪を目前に、スポーツへの関心の高まりをきっかけとして、世界

情勢にもっと関心を持つ機会になればとの思いもあります。米中貿易戦争、北方領土問題、北朝鮮情勢など隣国あるいは身近な国との諸課題から中東・欧州他、様々な国や地域的情勢が自分たちの生活にどう関連し、影響しているのか。世界が混乱し、民主主義の危機が迫るとも言われる昨今、その歯止めとなる役割が担えるのは新聞です。紙でもネットでも、タブロイドでも別刷りでも、なんでも構いません。とにかく読者が勉強になった、分かりやすく読み続けられた。商品力向上で読者を魅了し、新聞社様が元気になって頂きたい。強くそう願う新年であります。



日本からの新聞古紙輸出数量・価格



第60回 九州・沖縄新聞用紙品質会議

新聞社、メーカー間の緊密な関係を築き更なる安定品質を目指す

今回で60回目を迎えた「九州・沖縄新聞用紙品質会議」は、大分合同新聞社印刷センター様にて、総勢36名出席のもと開催致しました。

まず本会議に入る前に、印刷センター様の工場見学を行い、広い窓から一望出来る輪転機や立体紙庫、また地下1階にある免震装置などを見学致しました。

本会議では冒頭に主催者を代表して八代工場長／島田よりあいさつを行い、続いて幹事会社の大分合同新聞社執行役員総務局長／菅圭介様より「ここ近年は予測出来ない自然災害が多く発生しているが、いかなる時でも新聞をお届けすることが新聞社の存在意義である。本日ここに集まった皆様により緊密な関係を築けるように有意義な会議をお願いしたい」とのお言葉を頂き会議が始まりました。



大分合同新聞社(幹事会社)
菅執行役員総務局長



島田八代工場長

当社と当社グループ会社からの発表

まず当社新聞営業部長代理／高木より昨年9月に発生した北海道胆振東部地震の被害状況と対応について発表し、災害時は業界が一つになって、新聞発行を最優先とした供給体制を整えることが重要であることを伝えました。続いて八代工場製造部長代理／畔高より「製造工程と安定紙質に向け

での取り組み」と題して、N2マシンの製造概要や古紙パルプの製造工程、また各設備の保守・管理方法やオンラインによる紙質データ測定、品質コントロール技術などについて説明がありました。

最後に当社グループ会社の日本製紙クレシア(株)西日本業務用品部長代理／佐藤より、輪転機の清掃作業時に使用可能な業務用製品の紹介を行いました。多量のインキを綺麗にふき取る「ワイプオール」、引張強度が強く破れにくい「ニトリルグローブ」、インクからの作業着の保護として「クリーンガード」の説明を行い、九州地区の新聞社様からご採用を頂いた事例も合わせて紹介致しました。

各新聞社様より当社製品使用状況報告

ここ近年指摘件数が多かった立ち上げ、停止時の損紙削減と見当ズレが今回は合わせて1件と大きく減少しました。一方でシワとパイリングは改善要望が多かった項目です。シワに関しては段付きローラーを追加、またテープを張ることで改善を図った社がありましたが、当社の改善内容として、紙の紙厚と平滑度を整えるカレンダーロールを定期的に交換することで、紙の走行性を安定させることを心掛けました。またパイリングに関しては吸水性や平滑性の調整など紙で取れる対策は引き続き行っていくことと、刷了時の刷版とブラン付着物及び紙面サンプル採取のお願いや、ブランの使用状況、印圧などの状況の情報交換を合わせてお願い致しました。

また今回は、一部の新聞社で発生した「デラミゴースト」現象についても議題に上がりました。新聞営業部主席技術調査役／藤田より発生メカ



ニズムの説明と、図柄やインキセット状況に大きく影響されること、また、用紙以外の諸資材や印刷条件と合わせて最適化が必要との報告を行いました。この現象に対する原因究明と対策を今後も追究していきたいと考えます。

次回開催場所は鹿児島

今回の品質会議で60回を迎えましたが、ここまで続けることが出来たのは各新聞社の皆様の多大なるご協力があったからです。この場を借りて御礼申し上げます。

次回は鹿児島県(幹事会社:南日本新聞社様)にて開催を予定しています。今後も品質会議が更に活発になり、品質向上につなげていけるように努力してまいります。

最後となりますが、この度幹事会社としてご尽力頂きました大分合同新聞社様に厚くお礼申し上げます。

開催日／2018年11月6日(火)～7日(水)
参加社／(50音順)大分合同新聞社、沖縄タイムス社、熊本日日新聞社、佐賀新聞社、長崎新聞社、南日本新聞社
(新聞社20名、日本製紙クレシア1名、当社15名 計36名)

第11回東北・新潟新聞用紙品質会議

BCP対策を推進し、新聞発行の責務を果たす

岩手県盛岡市にて開催

岩手日報社様にて、総勢44名により「第11回東北・新潟新聞用紙品質会議」を開催しました。

会議は、石巻兼岩沼工場長／音羽よりあいさつを行い、続いて岩手日報社専務取締役／野口純様より「新制作センター建設に当たり、場所選びは最も気を付けた点であり、地盤が固いこの場所を選びました。また北海道新聞社の旭川工場を参考に、凍結防止対策で3カ所ロードヒーティングを導入しています。今日、明日と皆さまの親睦を深め、岩手のおいしいお酒を楽しんでください」とのお言葉を頂き、開催しました。

新聞社様及び当社からの発表

岩手日報社制作局長兼制作センター長／藤澤朗様より「新制作センター概要とBCP対策」を発表して頂きました。

新制作センターは三菱ダイヤモンドスピリッ



トを2台有し、BCP対策として、地震対策で安定した地盤に建設、巻取は緊急時の朝刊面建てにて12.5日分を常時備蓄、水は井戸水も使用可能、インキは最低10日間印刷分を常時備蓄、自家発電機を設置し訓練含め隔月で自家発電での印刷を実施、制作センター内に紙面製作可能な環境を整備、などの取り組みをされていました。新聞社の責務として、緊急時でも新聞発行を止めないという決意を感じました。

続いて、新聞営業部長代理／高木より「北海道胆振東部地震の被害状況と対応」を発表しました。

今回の地震で当社勇払事業所及び王子製紙苦小牧工場の新聞マシンが一時停止しました。東日本大震災や熊本地震の教訓から、早急な安定供給体制の構築が必要と判断し、新聞用紙委員会にて翌日に非常事態宣言を発令、加盟各社協力体制のもと供給任務の遂行に努めました。しかし新たな課題も見つかっており、今後も非常事態の在り方について絶えず考えていくことを報告しました。

各新聞社様の当社製品使用状況

事前アンケートで一番改善要望が多かった見当ズレについて、想定される発生メカニズム、対策として天地方向は巻取の個体差を小さく・巻取を緩く巻くこと、横方向は耐水性付与が有効であることを報告しました。今後も更なる品質改善に努めてまいります。



岩手日報社(幹事会社)
野口専務取締役



音羽石巻兼岩沼工場長

ディスカッション(テーマ:人材育成)

各新聞社様で実施している人材育成の取り組みをご紹介頂き、意見交換を実施しました。取り組み内容として、期間を決めての新人教育、実務を通してのスキルアップ、教育部会を設けての技術伝承、外部研修受講、輪転機メーカーでの研修、定期的な自己能力の棚卸しを行い新たな業務目標を設定する、などがありました。その後、各新聞社様同士で活発な意見交換がなされ、重要課題として人材育成に取り組まれていることが分かりました。

最後に、幹事社をお引き受け頂いた岩手日報社様始め、ご参加頂きました各新聞社様の多大なるご協力に改めて感謝申し上げます。

開催日／2018年10月12日(金)
参加社／(50音順)秋田魁新報社、岩手日報社、河北新報社、デーリー東北新聞社、東奥日報社、新潟日報社、福島民友新聞社、ミノリ郡山工場、山形新聞社
(新聞社25名、当社19名 計44名)

山陽新聞早島印刷センター

今回ご紹介致します印刷工場は、岡山県早島町早島にある「さん太しんぶん館」(山陽新聞早島印刷センター)です。災害にも強い最新鋭の設備と最大32ページのカラー印刷が可能な輪転機を備えると共に、館内にはNIE(教育に新聞を)などの活動に利用出来る学習・見学施設もオープンさせました。情報発信の新たな拠点として期待される「さん太しんぶん館」の魅力について小野雅宏取締役マネージャー兼早島工場長にお話を伺いました。

インタビューアール かわら版NIPPON 編集長 高木 宏昌 編集委員 廣本 剛
関西営業支社 長瀬 和彦



ユーザーインタビュー



小野雅宏取締役マネージャー 兼 早島工場長

版替え時間の短縮と作業効率の向上を図る刷版自動着脱装置を導入。システマック製の刷版印字装置(Miyell)や検版システム(Scope)を採用し、刷版装着ミスにも対応しています。刷版は環境に配慮し、廃液を出さない現像レスを採用しました。また、給紙部にはハンガー 82基を設置しています。これにより、朝刊印刷前に当日使用するすべての巻取りの仕立て準備が完了出来ます。その他の設備としては、メンテナンスの省力化のため、ドクターブレード洗浄装置の採用、インキパンのガラスコート化を実施しました。更には、インキミストの拡散、結露防止を防ぎ、電装部品の延命化と空調ランニングコストの低減が期待出来る「新印刷空調システム」を設置しています。

巻取り搬入設備についてお聞かせください

平面紙庫と一体型の巻取り搬入口になっています。クランプリフトを1台所有し、ウイング車(縦積み)からクランプリフトで入庫致します。雨天時にはウイング車でも搬入口の中に入れるスペースを確保しました。平ボディ車と比べると、高所作業となる雨避シートの脱着やクレーン操作の負担がない分、作業効率は格段に改善しています。荷役作業負担の軽減や安

全という観点では、優位性は間違いないでしょう。またクランプリフト自体もバッテリー式を採用し、騒音や環境面でも配慮しました。ドライバー不足がささやかれる中、今後当工場が物流問題の解決型のモデルケースになれば良いですね。

災害対策への取り組み

大災害時にも新聞の発行が継続出来るよう、建物は免震構造を採用しました。また、長時間の停電にも対処出来るよう非常用自家発電機(1750KVA)を設置し、受電の本線、予備線両方ともダウンした場合は自動で起動します。立体紙庫と平面紙庫を合わせると約300本の巻取り紙を保管出来ますので、この非常用自家発電機で8ページの新聞を一週間発行することが出来ます。普段は動かない設備ですので、定期的な確認が重要です。いざという時に慌てることのないよう、有事の備えを万全にしたいと思います。その他、本社ビルでの編集工程に支障が発生した場合に備え、臨時編集局を開設出来るスペースを確保しています。

地域とのかかわり方

岡山のNIE(教育に新聞を)、NIB(ビジネスに新聞を)の拠点施設になるように本格的な学習展示施設を整備しました。1階には

高さ8mのガラス張り立体紙庫とシアタールーム。

3階は取材から配達までをパネルや映像で紹介する「新聞が届くまで」と、明治12年の創刊以来の本社と国内外の動きをパネルで紹介する「地域とつながる山陽新聞」の2ゾーンで構成しています。その他にも山陽新聞の全地域版などの閲覧と、創刊から現在までの紙面が検索出来る「アーカイブスペース」を設置しています。

新聞づくりを体験出来るコーナーでは、インキの匂いや輪転機の印刷音を身近に感じる「体感デッキ」や、新聞が印刷され包装、梱包までを全面ガラス張りの通路から見ることが出来る「輪転機ブリッジ」で構成されており、五感で感じられるよう工夫をしています。

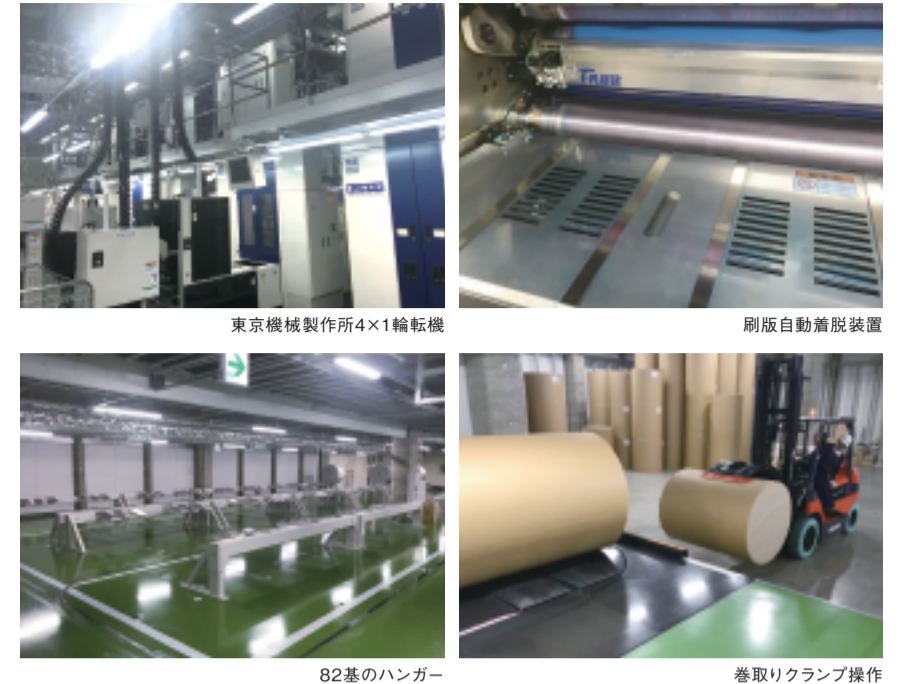
一般見学は2018年6月より受け入れており、現在までに約8,000人の皆様に見学をして頂いています。

「さん太しんぶん館」の学習・見学施設が、子供たちの考える力、表現力を養う場になってくれば幸いです。

今後の取り組み

今回の新工場は最新鋭の設備を導入しています。まだ稼働後半年ですが、設備の能力を十分発揮出来ていません。更なる紙面品質の向上、損紙などランニングコストの削減が大きな課題です。輪転機の稼働率向上も真剣に考えていかないとはいけません。今後も地域の人に密着し、読者の信頼を得るためにも安定稼働に努めてまいります。

この度はご多忙のところ取材にご協力頂き、誠にありがとうございました。山陽新聞早島印刷センター様のますますのご繁栄を祈念致します。



- 設備概要**
- 輪転機：東京機械製作所 CT-ECOWIDEⅡ 3セット
 - 紙面検査装置：東機システムサービス INSPECTOR-600
 - 立体紙庫：222棚(平面紙庫70本)
 - AGV：AGV MarkⅡ 8台
 - ハンガー：82台
 - 非常自家発電機：ヤンマー(1750KVA) 1台

日本製紙ランナーズ77 活動報告

RUNNERS CLUBメンバー4名が、第28回ぐんまマラソンに初参加



77はフルマラソン 42.195kmを新聞用紙に換算すると約77連(77,000枚)であることが由来となっています。

Member's

- 総監督 前田 高弘 部長 廣本 剛
キャプテン 山野 由宇 マネージャー 野澤 智子
部長 吉原 絹代・谷口 哲章・佐藤 孝・沖山勇介・後藤 貴司・向高 幸成

かわら版NIPPON編集委員 後藤 貴司

自身初のフルマラソンは、上州のぐんまマラソン。結果は4時間23分。個人的にタイムには納得しておりませんが、無事に完走することが出来ホッとしております。レース前に元アスリートだから軽く3時間は切れるでしょ!!と各方面から叱咤激励を頂きましたが、その際の苦しいのリアクション通りの結果となりました。4時間は切れるかなど高をくっつけていましたが、そんなに甘くはないですね。フルマラソンは30キロから悪魔がいると言われてはいますが、まさにその通り。膝がダウンと重くなり、更に上州のからっ風に阻まれなかなか前に進みませんでした。沿道からの群馬県民皆様のご声援に後押しされ、なんとか走り切ることが出来ました。お世話になりました上毛新聞社様、心より御礼申し上げます。

